第５課　天の聖所のおけるキリスト

【暗唱聖句】

「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき」フィリピ2:9、10

【今週のテーマ】

今週は天の聖所におけるキリストの働きについて学びます。

【日曜日・最高の犠牲】

キリストの犠牲について学ぶことは、終末に備える上で役立ちます。わたしたちのためにキリストが何をしてくださったのか、そのことを知ることによって望みに満ちた未来が見えてきます。

「肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです」ローマ8:3

神の御子であるイエス・キリストは、罪を取り除くために罪深い肉と同じ姿、すなわち人として地上に来られました。そして、罪を罪として処断すなわち、さばいて、はっきり処理してくださいました。従って、罪の問題はすべて解決されているということです。

「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります」第一コリント15:53

キリストが罪の問題をすべてを解決してくださったおかげで、そのことを信じるものたちはやがて「朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着る」、つまり永遠の命を得ることができるようになりました。必ずと強調されているように、ここに曖昧さはみじんもありません。これを幼子ののように信じるものは必ず救われます。

【月曜日・神の子羊】

「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」ヨハネ1:29

ヨハネはキリストは「神の子羊」と表現しました。子羊は聖所において罪を取り除く犠牲の動物として捧げられていたものです。つまり、ヨハネはイエス・キリストを、これまで聖所で捧げられていた子羊によって象徴されていた人間の罪を取り除く犠牲の供え物そのものであることを宣言したのでした。

「天使たちは大声でこう言った。「屠られた小羊は、力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です」黙示録5:12

天使たちも同様に、イエス・キリストを「屠られた小羊」と呼ぶことで、キリストがなさる働きを理解し、賛美しています。

「地上に住む者で、天地創造の時から、屠られた小羊の命の書にその名が記されていない者たちは皆、この獣を拝むであろう」黙示録13:8

「屠られた小羊の命の書」には「天地創造の時から」その名が記されている者たちがいます。これは救われる者たちを神様が予定されているというよりも、すべてを予見されているということです。重要なことはやはりここでも「屠られた小羊」とキリストについて描写されていることです。キリストの犠牲によって命の書に名前が書かれることになったということです。また、天地創造の時からというのですから、このときにすでにキリストが人となり人類を贖うために十字架にかけられることがわかっていたということです。命の書に名前が記されている人たちの特徴は、獣つまり神様以外のものを決して拝むことをしないということです。

しかし、キリストの働きは単に犠牲となって十字架にかかり死なれることだけではありませんでした。犠牲の子羊がキリストを象徴していたのと同時に、大祭司が罪を除去していたその働きも、キリストの天での働きを象徴していたのです。ヘブライ7章ではキリストが大祭司と呼ばれ、地上の聖所におけるアロンの家系の大祭司たちよりもはるかに優れた働きをする姿が描かれています。

「この方は、誓いによって祭司となられたのです。神はこの方に対してこう言われました。「主はこう誓われ、その御心を変えられることはない。『あなたこそ、永遠に祭司である。』」このようにして、イエスはいっそう優れた契約の保証となられたのです」ヘブライ7:21、22

【火曜日・私たちの大祭司】

「しかし、イエスは永遠に生きているので、変わることのない祭司職を持っておられるのです。それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります。このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。」ヘブライ7:24~27

イエス・キリストは永遠に変わることのない祭司です。つまり、わたしたちのために執り成しをしてくださり、そのおかげでわたしたちは神様に近づくことができ完全に救われるのです。このことがここに明快に宣言されています。

「雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです」ヘブライ9:12

ここでもキリストが私たちのために、「御自身の血によって永遠の贖いを成し遂げられた」とはっきり書かれてあります。もはや足りないものは何もありません。それはただ一度のことであり、永遠の効力があります。ここにわたしたちが何かを付け加える必要はないし、そもそもそのようなことはできません。

【水曜日：私たちの仲保者】

「わたしたちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に入って行くものなのです。イエスは、わたしたちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです」ヘブライ6:19、20

キリストが私たちのために何を成し遂げて下さった希望をはっきり悟ると、それは錨のように魂を安定させます。また「イエスは、わたしたちのために先駆者として至聖所へ入って行き」、「わたしたちのために神の御前に現れてくださり」（ヘブライ9:24）、ご自身の流された血による功績により、わたしたちが清められ、聖とされていることを宣言してくださっています。

それでも私たちは罪を犯してしまうとき、救われるのだろうかと不安になるかもしれません。これは自分の功績により救われるのだと無意識のうちに考えてしまうからです。「キリストは常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになる」（ヘブライ7:25）ことを忘れてはなりません。

【木曜日：贖罪日】

「このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません」ヘブライ9:23

旧約時代地上の聖所においては1年に1度（聖書暦第７月の10日目）に贖罪日が制定され、大祭司が至聖所に入り、イスラエルのすべての罪を贖う儀式を行いました。

「アロンは年に一度、この香をたく祭壇の四隅の角に贖罪の献げ物の血を塗って、罪の贖いの儀式を行う。代々にわたって、年に一度、その所で罪の贖いの儀式を行う。この祭壇は主にとって神聖なものである」出エジプト30:10

この贖罪日は天におけるキリストの働きを象徴していました。これはダニエル書8:14の「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る」という預言の成就となります。

＊ユダヤ教の聖典であるタルムードには、紀元30年頃（キリストが十字架にかかったころ）の大贖罪日以降に起こった不思議な出来事が記録されています。

「神殿崩壊の40年前、西側にある灯が消えてしまう、赤いひもが赤いままとなる、主の「くじ」が必ず左側になる、神殿の扉を夜に閉めると、朝になると勝手に開いている」

西側のメノラーは24時間絶やさず灯し続けなければならないものなので、祭司たちは常に火が消えないように余分のオリーブ油を用意し注意を払ってきましたが、どうしても消えてしまうのです。これは主の臨在が消えたことを意味していました。これと同様に、神殿の扉を夜に閉めると、朝になると勝手に開いているという出来事も主が神殿の聖所から出て行かれたことを意味していました。さらに、罪をかぶせて荒野に放たれるヤギ（アザゼル）には、赤いひもが結ばれており、これが罪の許しを象徴するためいつもは白色に変わっていたのですが、赤いままとなり、神様がそのいけにえを受け入れなくなったことを示しました。そして、大贖罪日に二匹のヤギのどちらかを「主のもの」と「アザゼル」に分けるためのくじを白い石と黒い石が使われました。2分の1の確率のはずですが、神殿がローマによって崩壊されるまでの40年間常に左側の黒い石のみが当たるのでした。これは確率的にありえないことでした。